

木の芽乃説
全

79
3686



ともうらうらと此度の時をひいてはとらぬまゝとて
てきたるにやと云ふはまはるにやと云ふはまはるに
らの所せしむるはまはるにやと云ふはまはるに
子のまはるにやと云ふはまはるにやと云ふはまはるに
いまもれまはるにやと云ふはまはるにやと云ふはまはるに
しちまはるにやと云ふはまはるにやと云ふはまはるに

文治十一年秋山城國の治平人上林威一
本芽院

兼ていふものには代もあつたものと云ふはまはるに
らうらうらと云ふはまはるにやと云ふはまはるに
傳つるものも一紙も見使はぬ戦のこゝろにやと云ふはまはるに

いふ事のむとせの友をいふまはるにやと云ふはまはるに
神^{カラ}邊なるをいふはまはるにやと云ふはまはるに
の寺ふあつたせも一紙も見使はぬ戦のこゝろにやと云ふはまはるに
大僧がまはるにやと云ふはまはるにやと云ふはまはるに
いふはまはるにやと云ふはまはるにやと云ふはまはるに
やうと云ふはまはるにやと云ふはまはるにやと云ふはまはるに
揚子なるをいふはまはるにやと云ふはまはるにやと云ふはまはるに
と云ふはまはるにやと云ふはまはるにやと云ふはまはるに
あつた伊國をいふはまはるにやと云ふはまはるにやと云ふはまはるに
世の人まはるにやと云ふはまはるにやと云ふはまはるに
あつた伊國をいふはまはるにやと云ふはまはるにやと云ふはまはるに

こそ思ひ置れ上人の言念院にありんとは母と事よ
せめて彼僧正のめりありとてかお出せられしは
も母院の世文治二年六月十九日のあはれ
おんせしちうとせられおひしうあつてはちこころい
くしあるあありたはくきくしきふたまきひし
んそかりせしうふそわらうもあはれ母のさふれはあ
ひかあはれまてこと國をいともあはれはまはれ
さあねし業あ福のさるあはれ人のうらみある人
うちうして流るるるきあうとてうけてはれをぬき
流りんものうらみとまれとまれ上人の言院の淨覺
大とらよとてうひてすはれとてのまをぬきてうらを

てそやのひの東大寺の戒壇とていむことうけられし
はやいそつらものなとらとてよあはれとてのせる
けふよの戒せしちうあはれ又は後何とてよ
地ころよゆきとあはれ連久二年とて入及せられ
母とていめとせははれとてあはれとてよたふふ
しは多かれはげしとてうらとてはよ業の種とて信
ころねしとてあはれとてあはれとてあはれとて
この母とてあはれとていしとてうらとてあはれとて
てらとていしとてあはれとていしとてあはれとて
といわぬ世よひらとては種十後の業とてあはれとて
して七千指業百指業とていあはれとてあはれとて

同為泰範答、啟山澄和尚啟云、兼蒙賜十茶、喜荷、無他、

○昔揮拾遺篇書牘云、思渴之次、忽惠_二殊茗_一、香味俱美、

○凌雲集御製吟詩不厭搗香茗、文華秀麗令制名提、琴檮茶老梧間、

○和名類聚抄卷十五、木器類、茶研、章孝標集、有黃楊木茶碾子詩、茶碾子、俗謂之茶研音加、音反、

○徑國集卷十四云、和出雲巨大守茶歌、惟氏山中茗早、春枝萌黃、椽櫛為茶時、山傍老愛為寶、獨

對金鑪炙、令燥空林下、清沆水沙中、漉銀鑪子、歎炭湏、史炎氣盛、盆浮佛浪花、起鞏縣坑、陶家盤、吳鹽和味、更美、物性由來是幽潔、深處斂石髓、不足比、煎罷餘香處、薰飲之、無事似白雲、應知仙氣日氤氳、唐人或ハ焙之、或ハ蒸之、入て茶と煮る、或ハ、東坡志林、
ハ茶といひて、薛純、詩、鹽損、係常戒、莖宜煮、更
滑といふ、詩といひ、
ハ、
ハ、

○田氏家集卷下乞滋十二篇、茶詩云、不勞外出好居家、大抵閑人只愛茶、見我鉤中魚、失眠、聞君園裡茗、為芽、詩行、許、編、何、妨、決、使、及、盈、筐、可、

得誇、庭梅近來春欲暮、莫教空腹猶看花、
真俗文談記云延喜二年醍醐天皇仁和寺朝觀
行幸御時法皇御對面後茶二盞有御勅和琴
一張為御引出物令進之給

○花名傳信上卷 云宇多の御門出家家のち四月三日觀
新寺此の延喜のころと仁和寺(新寺)のち四月三日
靴と履せしめて又手三杯(洋)と飲り又三杯も法皇も
向侍茶と依せしるもあり伊法杯の時此依り此と
在俗の時此の依りしるあり

○新儀式上卷 天皇賀上皇御算事云、侍御膳
臺盤二脚、次侍御酒延喜十六年法皇侍御茶也、又次台

加親王大臣參上候筭子數 延喜十六年侍御膳次名大臣
并僧正聖實濟世親王令候賜贈茶次名上皇之親王等

○菅家文草卷四八月十五日夜思舊有感詩云、茗葉不
香湯免飲酒、蓮華妙法換吟詩

書懷詩云、東方明未睡、悶飲一杯茶、後集雨夜詩
云起飲茶一椀、飲了未消磨

○都氏文集鈍子迴文銘、多煮茶茗、飲來如何、和
調體內、散悶除病 本銘文粹卷十も載る

○延喜式卷廿三民部式云、年料新器尾張國窰器
大椀五合 徑各九寸五分 中椀五合 徑各七寸
茶小椀 徑各六寸
椀廿口長門國窰器大椀五合 徑同上 中椀十口 徑同上

小碗十五口径上茶碗廿口径上右兩國所進年料
雜器並依前件、其用度皆用正稅

又後御下尾此等の款物も茶碗とのて幾口と
しお敷と志多うねんをす法はどの等の小碗も同一又碗廿
口とて六等此茶碗の款とす法とよかる一様てあふ
この尾尾此款物も小碗或は茶碗廿口とて五等と茶の
字とてお中碗のよと入るさへもに幾口とて字を税
とるるも一り一志多うねん小茶碗とてしおね茶
小碗とハしおへくはけふくら此碗もす法もこの
あふの款物とひくきとるはけふハ文字の終まも
一様とてなるもあふ

○年人式云年料竹器茶籠廿枚方二尺、新篔竹
各六株

○本朝文粹卷十二慶保胤晚秋過冬州薬王寺
有感、参河州碧海郡有一道場、曰薬王寺、有
茶園、有薬園

○権記長徳元年十月十日條云、下給出納為親造
茶所情者今年料造進御茶料物文

○北山抄卷二御佛名事、裏書云、天曆九年
十二月廿二日左大臣参入入道親王依名参候、
結願後撤御前疊施菅園庄入道親王侍有
仰奏管弦先吹雙調、法親王依仰彈和琴

○玉海安元二年三月

靈岩寺大毘所記作茶湯記云建仁寺北關山子
光國師梅尾此尚意上人曰取一入者一曰附一曰
一曰一曰茶の種を抄きく治病を皆採山より水を植
定上茶と号凡上人の水と梅尾より傳へ又宇治の梅尾
この記記おろきり下より年々々々々

○東鑑卷廿二云建保二年二月廿四日將軍家聊序之病
惴諸人奔走但無殊御事是若去夜御因醉餘
氣歟爰系上僧正候御加持之處聞此事稱良藥
自本寺召進茶一盞而相副一卷書令獻之一所譽
茶德之書也將軍家及御感悅之

○啻茶養生記序云茶也養生之仙藥也延齡之
妙術也山谷生之其地神靈也人倫採之其人長
命也天竺唐土曰貴重之我朝日本曾嗜愛矣
上卷云採茶時節採茶樣調茶樣我國人不
知採茶法故不用之還識曰非藥是則不知茶
德之所致也榮西在唐之昔見貴重茶如眼有種
く法不能具注給忠臣施高僧古今義曰
下卷云喫茶法極熱湯以服方寸匙二三匙多
少隨之但湯少好其又隨之
○梅尾明惠上人傳記卷下云建仁寺長老ヨリ茶ヲ
進セラレケルヲ醫師ニ是ヲ問給フニ茶遣困消食ニ氣

快カラシムル徳アリ然レトモ本朝ニ善カラサル由申ケレハ
其實ヲ尋ラテ兩之本枯初ラレケリ誠ニ眠ヲサテシ
氣ヲハラス徳アレハ衆僧ニモ服セシメラレキ或人語傳云
建仁寺僧正御房大唐國ヨリ持渡給ケル茶子ヲ被
近ケルヲ植ソタテラレト云々此傳記ハ上人の弟子
喜海沙門に於かるなり

○年中新奉歌合亦おもた上野御川右季伊渡経女
房二條判詞云季伊渡経とて大慈母徳と云々歎め
志きく海セラレ侍りてわひき茶とて侍り茶を飲ぶ
有りさほ茶はむいりておやけのめりぬ物そそ
りお大母も茶を飲りて侍りて中ひさくは尾の

何れ上人と云はん茶のそ終る急くもゆるりやはひるるそ
そくそよこし

○傳大母強う茶湯化の記よき舉り

○御修寺慈尊院崇海信正撰てし真言傳弟七
戒丸言并上人傳ハは年十六歳より説文是上人ノ
弟子初慈上人に隨テ出家シ東大寺ニシテ具足戒ヲ受
建仁元年紀伊國系野菴室ニテ上覺上人ニツキテ灌
頂ヲ受トシエタリ本又記セルハ上人ノ弟子喜海沙門カ
述タル明惠傳記云上人ノ弟子喜海沙門カ

○太平記卷七ノ切破城軍事云大将ノ下知ニ隨テ軍勢ニ
十軍ヲヤメケレハ慰ムカタヤナカリケシ或ハ喜名及六ヲ折テ日

ヲ過之或ハ百服茶褒賤ノ歌合ナトテ叙テ夜ヲ明ス卷
十九光嚴院殿重祜奉云物ニモ覺工又田舎ノ者トモ
茶ノ會酒宴ノ砌ニテ

○埃囊抄卷ニ云十服茶ノ法茶ニ種ヲ以テ各四服ヲ累
テ各一服ヲ取テ試トス仍殘ル所ニ之九服ナリ不試茶一
種アルカ故ニ是ヲ客ト云也是ヲ三種試ト云ナリ近來
ハ茶三種ヲ以テ各三服ヲ累テ客ヲ加フ是ヲ累攻ト
モ云先試茶トモ云也最初ニ聞テ一ト定テ札ヲ不步故ニ
一種試トモ云ナリ是ヲ四茶ト云四ノ類四カ四也聞一知
十故ニ尔云也又貢茶ト云ハ子貢カ貢也子貢ハ聞一
以テ知二ト云リ以四種成十服茶ナレハ一種ヲ以テ三服ヲ

累若ムヲ聞一知二即知三也同シ茶ナルカ故ニ四テ度ニ知所
ハ方ナレトモ十ヲ知義ハ同シキカ故ナリ

○喫茶茶禮茶云昨日茶會茶名光臨茶之條茶在念茶之茶思
狀茶不茶少茶過茶也茶勢茶更茶多茶留茶師茶在茶障茶何茶日茶作茶彼茶會茶不茶考茶禮茶
因茶安茶殿茶懸茶珠茶簾茶茶茶大茶庭茶鋪茶玉茶紗茶軒茶香茶幕茶窓茶垂茶帷茶
好茶士茶謝茶茶茶會茶氣茶既茶集茶之茶後茶初茶由茶織茶匠茶之茶歌茶次茶索茶麵茶茶茶一
返茶然茶存茶心茶山茶海茶臨茶物茶節茶飯茶以茶林茶園茶子茶菓茶甘茶哺茶其茶存茶起茶也茶退
席茶時茶安茶奇茶殿茶侍茶棧茶浦茶於茶二茶階茶批茶帷茶中茶於茶四茶方茶是茶別茶喫茶茶茶
之茶亭茶對茶月茶之茶初茶也茶左茶思茶茗茶之茶彩茶色茶釋茶也茶是茶山茶說茶化茶之茶旅
也茶親茶之茶如茶後茶之茶事茶後茶觀茶者茶善茶化茶不茶現茶之茶以茶女茶席茶之茶善
况茶文茶殊茶為茶初茶後茶年茶山茶於茶為茶面茶餅茶卓茶懸茶色茶深茶是茶胡

重儀猶避之端何事不足喫茶行來云日景漸傾
茶禮將終

○海人藤原忠中云有人ノ茶ニテ茶持アツカヒ不知ク下
之方可智知リ之建蓋ノ茶一投入テ湯ヲ半汁入テ茶
筥ニテ夕ツル時夕、フサト湯ノ劑ニル極ニ夕ツルリト阿
伽井ノ服弁上人、德申キサレハ彼同宿トモノ茶夕ツルカトヲ
笑ハ充可然也

○吳制庭列社耳云、能為通分ノ秘苑、深溪、河、小、曹、天
物谷、一ノ溪、外、畑、岩、傳、門、不見、指、反、ホ、冬、入、高、臺、後、江
邊、之、後、一條、深、淵、此、他、流、山、一、尺、米、從、耳、云、斯、院、最、暖
氣、早、至、艾、芽、既、甘、願、休、南、水、之、車、不、定、可、有、遊、山、修、也

○字、信、者、當、代、正、身、之、事、貴、親、梅、尾、之、此、間、能、重、微、之、仲、信
必、下、不、虛、之、信、不、之、彼、思、合、念、忘、字、先、被、指、使、於、二、方
誓、就、早、晚、之、友、友、可、被、定、事、女、之、為、所、欣、隨、之、高、臺、二、个
進、之、信、就、日、深、淺、之、是、隔、之、一、茶、之、彼、弱、之、彼、又、西、江
庭、入、木、教、合、之、信、則、伽、井、送、外、畑、小、畑、孫、洞、ホ、之、名
室、本、弄、招、茶、瑞、地、攝、合、已、下、至、一、五、茶、之、彼、好、之、也

○沙門蘭舟述酒茶論云、西齋詩話云、壽上人曰、自
日本以其國所產梅尾山茶、見惠、賦詩謝之、其果
云、幸得梅山信、初嘗日本茶、本朝梅尾山為第一
字、治次、之、梅、与、梅、相、似、故、通、而、用、近、代、好、茶、者、以、字
治、為、第一、梅、尾、山、次、之、者、字、治、茶、之、別、稱、曰、無、上、曰

別義日極言

幸抄生花 老士信條中抄出

少保を抄へたる多うて余如たるも柳の平自ぬるよあを
入我れ草花を為らうとて小刀を添て血信あるのゆへ生
るきりく一見西仕く一と西仕あり一余如たるも柳花
配りもぬくても抄抄さうやと見らまよかともあらく
元をたう懐く一鼻紙を五斗こよりとよして草花の
由を思えあつてとてよき信よ七巻をたうく小刀の柄
よ右のこよりとてゆひかて柳のまじり小刀を突きまら

りる大りのものハさうた入まよそ道とえくる人ハあま
出合てもあらむりなくお急の氣持各感みせられら
とて読氣たよそたつとめまひ我りのよぬたる母
ハ做し條と氣急なまよとてまらうとて

少利体 日一

少利体ハ從來泉列城の町人極秘の志とて善とぬ
りる武付反月屋條と柳花とれ流うと柳て善とぬ
這せらるるよう時の人於兵の夜晩とて解央一り
けりよと古閑の者善と一古一後う善一柳舞うけらる
名に記され備未ゆの柳花とるま柳花か一もさ
善てやとらる人も善とて迷惑一りる善善とも

新編ノ夜頃
利体ハ古風
乃其とも云
善利体利體
いりまら
と云

風形流茶之式

水指茶入飾置 茶盃持 ちて持たし 出テ振りたニテ候也

座 右ニテ茶入右ヨセ九ノニテ茶碗九右ニ持直組合 好し片ハ

ニテ九 右ラ候 又九ニテ組合水建へ蓋入柄杓を九ニテ持出テ振り

建水膝頭ノ通りへ力キ九ニテ柄杓九力てへ蓋蓋九小板

九ノ角女取ニテ 好ノトキハ蓋蓋持出テ好フテノ右ニテヘリヨリ

上ケテ茶盃蓋蓋ニテ九柄杓九ノ 好ノ目ニテ九ノ柄杓九ニテ九ノ

ハツシコホシへを茶盃九ノ扱イ蓋蓋ニテ 柄杓九ニテ引礼△建水九ノ出ス

曲水指ノ時ハトシメ蓋蓋ニテ 好ニテハ九ニテ △右ニテ茶入九前へ蓋蓋ニテ揮ニ右

ニテ組トキ引キヨリ仰向ケ九右ニテ茶入九へ出シワナヲ出シ

右ニテ揮へ九ニテ組引物ニ代蓋ノ口向ヲユルメ右前ヲユルメ九右

ノ組直シ右ニテ上ヨリ九上九へウケ持右ニテ代蓋ノ口向ヲ出シ

手茶ヲ出シ茶入九右ニテ代蓋持茶入茶盃代蓋ノ口延シ

返シトシホウ取右ニテ 風形下流指ノ右カ △帛九ニテ膝ヨリ九

角ヲ二枚置キ九右ヲ配円ヲ外ニシテ二隅ハラヒ四隅目ノニ

右ノ人サシ指ハサシ角ト角ヲ持拵ハラウテヨリ 右アリ 右上下九

下ケ九ニテニツシタ、ミ中ヨリ 好ノ目ニテ 右ノ指先ニテ

又九ノ方ヨリ右ニテ持人サシ指又手膝ノ上へ引九ニテ

茶入九フタ向キ茶トフキ照ヲ右出シニ持フクサ持直

シ下へ少掛ん為ニメ帛持ノ上へ引茶入水指ノ前へ

九へ 好ハ好流ノ九角ト水指トノ右前邊ニテ好ノ方ヨセ蓋○

茶ノアルフタノ茶入ハ和紙へ入トキ茶ヲ右ニテ入蓋蓋

水ヲ一合入サシヌクニ湯ヲ加入解ハ水ハ熱ス少湯ヲ入ケテ交
シ極ル元ノ如ク是重△茶碗ヲ元ス茶碗中ヨリ又キ
元ノ如ク重右ニテ茶碗元左ノウケ香口也ニ右ニテ也ス
帛サハキタノ形目客付ト茶碗ノ方へ向ケ出ス△上客
茶碗ノ側へヨリ帛トリ茶碗ノセ中坐茶碗下ニカキ
帛ヲ目ノ茶碗ノ方ト自手ノ方へシテ也元有フクサ元茶碗
ニノセイタノキ飲△ニ角カケ上客へ向居解ニハヒサク元茶碗ノ
カケル但カウヲハツスフタガキ元建水解ニハヒサク元茶碗ノ
次へ重客へ向ニシテ也 未だ飲片を忘レ初へ
向極ル元水指スカ茶巾ニホルカ解ニハヒサク元茶碗ノ
極ル元カマヘ元ノフタトリ極ル元茶巾ニホルカ
元茶巾ノフタヘ重右ニテ水指ノフタ元左ニテ水指ノフタニテ也
△帛茶碗カヘラハ帛元左ニテ水指ノフタニテ也

香口多分ニシテ下ニ重右元中色ノトキ極ル元ノフタヲキ湯一ツ入
右ニテ元左ノウツニ茶巾ト右ニテ茶巾ト右ニテ茶巾ト
右ニテ極ル元上ヨリ水指也ニ水ヲ加入茶碗サハヒトツノキ
茶巾ト右ニテカシカタムケ茶碗トウニシニ度初ト遠茶アト
サハヒトツノキ向へ也茶碗元左ノウケ重右ニテ茶碗元左ニ
テ水建右ニテ水指也ニ茶巾ト右ニテ茶巾ト右ニテ茶巾ト
目ヲ上ニシテ茶巾ト入茶碗元左ノフタニテ茶巾ト
へ茶巾トハタキ右ノ膝ノ上へ茶巾ト右ニテ茶巾ト右ニテ茶巾ト
右ニテ茶巾ト右ニテ茶巾ト右ニテ茶巾ト右ニテ茶巾ト
初ノ色仕也ニカイ先拭右ノ手少ク也也ニ右ノ方へ也ニウツム
ケ茶碗へ是帛ニ茶巾ト右ニテ茶巾ト右ニテ茶巾ト

出上之丸へス工入△布を掛出スハリ糸を重帛サハキニテ垂ラ
コテ丸上向ゆま掛帛少節遠ニセ巻ニテ掛帛ノ手懸
引垂て遠水ノ糸に重帛仕色茶碗引ヨセ陽ヲ入コホシ茶
巾丸掛茶巾入大ニテ丸に重帛巾丸巻ノ巻へ重帛掛
トリ垂レ丸巻ヲ入垂レ元ノ巾へ重帛掛茶巾入二色糸ニ出ス
実吾内ニ勝自入烟茶を掛出ス巻ニ出スハリテ客
へ出出スハ付客ヨリ茶入好ム好サルハ巻を飾垂茶巾
丸水掛ノ大ノフ子へセ茶入ハ巾丸丸巻ノ丸ニテ上
ヨリ丸に茶入懸ハ重帛茶巾を重帛入大ニテ垂レ懸ハ重
茶碗返リ巻ニ仕色ヨリ糸書流茶巾式ニアリ
甘酒茶巾之式

水指掛出重 丸掛ハ大ノ丸ニテ丸引白丸ヨリ 垂レ大茶碗丸ニ掛
出上ノ丸 丸掛ハ大ノ丸ニテ丸引白丸ヨリ 垂レ大茶碗丸ニ掛
ヨリカコレ茶碗 丸掛ハ大ノ丸ニテ丸引白丸ヨリ 垂レ大茶碗丸ニ掛
丸ニテ丸大ニテ重 丸掛ハ大ノ丸ニテ丸引白丸ヨリ 垂レ大茶碗丸ニ掛
巾板ノ角へカキ付 柳掛引 丸掛ハ大ノ丸ニテ丸引白丸ヨリ 垂レ大茶碗丸ニ掛
丸掛掛カウヲハワシテ巻 丸掛ハ大ノ丸ニテ丸引白丸ヨリ 垂レ大茶碗丸ニ掛
巻重丸ノ巻へ重帛リカキ付 丸掛ハ大ノ丸ニテ丸引白丸ヨリ 垂レ大茶碗丸ニ掛
丸茶巾カキ帛掛ヨリ丸大ニテ角丸丸ハ巾丸丸サハキタ、
コト大ニ掛帛掛ヨリ丸掛重帛巾廿八キ丸ニ掛大ニテ
茶巾丸掛重帛ノ上へ重帛大ニテ茶巾を重帛巾掛ノ巾茶巾
巾茶巾ヨセ大ニテ丸掛丸丸カマへ巻ノフタ丸茶巾巾をノ
巻へ重帛掛掛重帛ニ掛掛入丸掛巾茶巾を重帛巾トウシニウ
茶巾コト大ニテ丸丸大ニ掛コホシ大ニテ茶巾丸茶碗ニウ

不淨とぬれては先流れを淨と受けとて神乃のまゝ
之先流葉の苙席ハ列世界と云ふ言ハ其流淨とて
寂意ハ心と云ふ言地と云ふ言後にはお人の心と
果して淨穢の差別なき事と云ふ言何れ淨と云ふ言
何れ穢と云ふ言と云ふ言今時茶席の葉ハけ言
と換へたるものこそ然れども御心よ其切を積
付かのおつらう言流れはよいつらう一あり体垢止れ
發書しもみ水のりもつらう改とつらうと云ふ言
よく流れと云ふ言とよく流れともかゝれぬ言其嚴和
尚相帯如流よ

茶爐 頭上言賓主 拂盡人間名利塵

茶室より人をお客と改へて賓主と云ふ言二れと云ふ言又
人情と云ふ言人欲れ私と除きある五葉六慾皆
名利の塵と云ふ言茶を拂ひて六根皆淨ある
時ハ流淨も言流りある言流れ月れた子沙界と云
して淨穢と云ふ言と云ふ言一け言を日得せしむ
母ハ竹履よりと云ふ言流れと云ふ言又葉の風
流もろと云ふ言葉と云ふ言流れと云ふ言

又

及母の言より流れは葉を心で扱ふ言古實
ことあり考へて言利休家流茶席は葉より物化は茶
のりとお云ふ言流り言道安も古實と云ふ言お云ふ言

子之礼一とあるはさういふ事には本意はあらず

人各宗と云

聘婦以茶

白何燕淡卷二右書之也序詳於南化寺輪路洛東
從心於白河流十ナリ 享保乙酉殊云癡自席之一張一之六十二

客問嫁娶礼送茶者有之何謂乎答曰明陳晦伯天

中祀四十四日凡種茶樹必下子後種則不復生故聘

婦必以茶為礼儀固有所取也今本邦婚禮約結

時聘物贈副茶此礼何時起ヤ未知

也

栗飯ありよけ凡俗者嫁にけりぬ嫁所茶と包く物

ありよけ也

利休五人

一語一云五正位より幸能を引

利休一人問ふは茶のハ

利休曰埋茶は多き

院敷茶より金子を委利休

院の向くとも茶中

皆くく茶と云

茶は

先程に別紙田

長先

読するに因りて田とていりておぼむくはまのちの田
の色候して万端れらぬものなりとて田内一色は
まじり

此の意、田一色に云川池田正樹庵筆

竹林院系於正家 小川正家の田のりまは古田誠歌の教
家として建てることその後の信信古田氏へ由りて田ま
移したる由りて先年アヤハ物方少塚を其のりまは
つさるる由りて信信の物方なり

都名正必書
のなき列の
公家と云り

○ 信田彦左衛門正家川平利休正家の孫ありと云
けつりおく竹の茶母はかひあはらわりの世と云
多や二名を信下 田の中よひりてすらぬるまをとりて

まはるゆのめは竹のりまは 信名お高 持のほはるるくまは
せてゆのむとてれもまはる竹のりまは 信名

りりりおく 信名 徳和少将保齊彦左衛門

その中 信名 東海宮宮海島島

ゆりゆり 信名 少塚園正家系正家

○ 文政五年六月成候吉原孫茶屋正家

袋日記
為作は

その親親まはる書太らる親あま上人に及候
比一は親 信名氏及古信名を云と云モノアリ
若御所叔氏ヨリカリサる

あろり一色候あろり一色茶のりまは信一まはる
茶屋は茶もあはら又学文よりて茶師のりまは
らうてのあはる茶もあはら只候れりまはる

いふに湯とてありぬる疑れくやむとて思はるる
のありふれば子細に他好まざるべし家
曾に中に入らぬふらハ善その因とてありしはあり
事源手し事と存せハ天のありねとてわれ好奇好
めれし一付道と信せん人となしひ和洋の長を
えりしとてありし一物所持の善者とて入り道の
善とて一好まれば格好とせし一付道とて一付道と
ありしとて

後次信規約

- 一 実家格を不承しし時とてふへし不承人おぼかり格とて事用と可被
- 一 身水守人格とてしとて要しいふけんの好要とん
- 一 至出信して実家格に入らふしとて善版の信をふ格信
- 一 是より遠は海云し
- 一 菴田彦平とてしとて世の雑信とてあり
- 一 佛佛相凡とてしとて信ありしとては実家格とて信ありいれおれとて
- 一 実家格とてしとて信ありしとては実家格とて信あり
- 一 一云とて信ありしとては実家格とて信あり

之中心の方面嘉の附の方所の位置と並んであるが、
たゞるに西延唐年中の事と述はるる山は史國師の
書系中直は元といふ事と並んであるが、
ハ古き事なり

○美は自利を多しと譯ちてハ識答を定といふ
人方のつとてさういふ事長人ノ果敢決意の事
意事なりといふ事も哲學者なる人あるが、
その世に就修の識量此教をさういふ事と並んである
くそのははしとてかゝる事なりといふ事孔子辨其
事なりとのせう言の張華と哲者の君子とさうい
も是のつとて國師も利は姑士ゆゑをたけ相る例

各業の長一なる事なりといふ事その和ある人の或は
してさういふ事識量定はさういふ事なり
古筆より言ハ唐世中にも猶もて自利をてありとい
あるは修姑の言才子の因ハ惟子を何事といふ事若ハ因
才子自業よりハ法也ハ何候せしは男も自利をて
志のも愛他との事といふ事ある事なり其の事
はてはるる道居の事なりと唐の山を其の事
一及書なりといふ事といふ事なり
いふことあり終り若くは定の時何事といふ事なり
たりたり者なりといふ事といふ事なり
を判の事なりといふ事といふ事なり極れと海へ一連

そは極れをさうらぬころ時子惟子を問ていこくは
私うちとちゆれうと極れをさうらぬころいこく
ゆと親りねる者曰く今取らぬころいこくは
かこしとありらる友このの極る者とありて何れを
えらむといひこのいこくは出まらぬころいこくは
り音の自利の凡るさうらぬと或んさういふ極る
事といひ一人自利者よそ子といひらるる我の自利と
自らやうしてある人の自利よあはれは生る自利とあり
いこくを始終極る者といひて極るころいこくは自利
こといこくはうけの遠ひといひていこくは自利と
の軍一りぬめといふといふと遠くはゆりていこくの

めをえ遠くをさうらぬといふぬといふは自利の
るいこく罪人なり

○ 日師 其^枝あつたの世孫は田家といふ歌を

老人ハ帛衣^{コカ#}をうりうり^{社説}年^{コカ#}やうぬる山田は極る
と極るいこくは孟子のめ味と先樹之の業れ一をさう
よこころ極るいこくは田家のめ味の先樹はありてさう
の仁徳のめ味の極るいこくはぬるよこころは老人
ありその家祖系と業と一法をの極るいこくは高ふ人
あり一牡年れいこくは業とを極るいこくはさうの極る
極るいこくは皆信なりとて信りし人なり年七十ふ
るも時日師あはれ極るいこくは極るいこくはありこの

飲茶貴得茶中之趣若不得其趣而信口哺啜
与嚼蠟何異雖然趣因不易知知趣亦不易遠
行口乾大鐘劇飲者不知也酒酣肺焦疾呼
解渴者不知也飯後嗽口橫吞直飲者不知
也井水濃煎鐵器慢煮者不知也必也山窗
涼雨對客清談時知之暑竹榻待月草榻
迎風時知之梅華樹下讀離騷時知之揚
柳池邊聽黃鸝時知之知其趣者淺斟細
嚼况清風透入五中自下而上能使兩頰微
紅冬月温氣不散周身和暖如飲醇醪亦
令人醉然茶語其人畧至于箇中微妙是在

得趣者自知之若涉語言便落第二義

○之谷丹下ハ鳥ノ宗点と改名と名ハ良朴南川と号一
又不編亦と云ふ系又の字子とて口矣とと一丁之
細子ハ大筋とて切炭とと云々短中へ下は西飛ちと
炭ハ大筋と打つけるとやく且由見の教ひ也の并儀を
精記とて白地自在と何と云々茶のよ工ぬり
串は一百と傳はかして知多一さゆて學又ハ茶子
くそあつしうと茶家の言よあつしんそ益云候
一はと何と茶及坊を同無るはあつしんと云つて
儒者格とて古うと云うと茶をてり一人と茶家の茶
友と七年と云うのと習ひぬり茶亭茶女といふ

あつて十短番の式に倣ひて茶を吞みけりてとと
とせり物より良朴られ茶を弄妓といふ名のわけ
るき名と日阜俗に笑ゆると嬉ひ同藩の地有御
先生に御して一種茶といふると編州其家よりハ
茶のつぎハ不用そのかりり茶と云ふ也

○開茶

茶忠惠茶録云。建安開試以水痕先者為負
耐久者為勝。故較勝負之說曰相去一水兩
水。此開茶之由也。谷南川講茶礼者其開茶
會約有試茶。有較茶。每茶一服分其香。氣
味。蓋与香式相為表裏。別自有所傳準而

厚蔡氏揭開茶二字以告耳。社友乃其賞會
標置為茗仙家生一色。請余作詩

開茶傳舊法。心賞極開場。霞中品。初定不須
問。蔡襄元文。己未九日後一日南湖塔正仲題

沈仕。其下法派。迷入謂開茶為茗。戰とあり。茶を
弄妓の娘子と經みよととゆる娘よととあり。南湖先生
の筆力を感へてとてぬ

本邦の水品ハ 宇治産此之の旨 乳タヌ法派 若柳の所
職此法水 大堰川 井出のむら 赤井川の淀くまらに
てまき坊井 方引の所 多々柴北履の茶井 醒井
若光 室至此亭解 羽別ウラ川 糸糸求カ麻子何

物々何々古田八州
古田の事

大福茶并茶巻 全上川梅形夜信


久松徳云世信之且之彼らる茶とち縁といふは其ハ
王後之六中二代村上帝立信は密寺の中をを伝及
世祖の付重と及よりく中なるは依らるぬの典と茶
を縁して世祖平復しゆふ故に毎茶之且よ六箇寺の
信茶と百信と上の縁也しゆふとめつく王後と縁ス
在信昔はて下人氏後病と苦む空也上人これハ
信を信寺の信し観者の其之を縁し茶巻を作し
て茶との事し世後病愈々し神敵茶巻之を信巻と
この茶巻の徳ありく咽よまて茶しといふりた外す

茶しそ又一奇事之當ちの茶湯の院と符を以て蓋
まふのけ後病と信らる切縁あり

茶 全上川梅形夜信

世の人皆ふ茶と僧の恵ふ剣ると不然文章茶巻
集之信と曰相談酌録廿名烟火暮雲間更而集ハ
信成帝以仁中二仲旅王撰く本於賣茶の久しき事
以てんく一信月堂茶花出扱るより本上代茶の
あるは是より海し茶之日本の種ありあふ日本
よ初て種ハ内裏よりなり

一 小島必運上物也

一 家敷九言新 人取 男或子三或九人 牛 

一 付村茶方多く方く田畑も茶ハ男女在来及ハ茶方之縁
之名爲ハウ治川御纏方く朝日鏡並鏡あり

一 付村所場ニ大津より南都より及ハ伊予次有 山草意
此用支之役有知也

一 兼州場有 田畑の旨れ多と種上あり

一 山後林ハ七所有ねあり 百姓皆山ハ茶田所有 山松芝山

兼山ニ於テ所地尾ウ治三有

一 宇治川山石川橋後川橋而よりウ橋留又ハ山石方茶
兼ニ津也

一 海川鱈獲有

一 付村茶後下ウ治橋長ハ屋上者中四有ハ山橋六ヶ不在茶
兼金山川地ニ茶方有付地也 海ハ板木より
ニテハ要也 此ハ種六ヶ有あり

一 付村伊予茶用之種ハの而之保也 伊予換之村有
百姓困窮ハ之也

兼取ハ山後信之事 上林等順

一 兼志身上在年子茶 兼志ハ伊予茶ノ類ニ有 何尤
運也 伊予茶ハ親國世代々大ニ借法仕茶茶ハ依然
船後ニ何と云ハ重中ハ船ニ乗ル有ハ者ハ大ニ持持取
一 内院也 兼志信ハ信先在年ハ茶ニ有也 兼志ハ信

伊初定所

荷露露烹茶賦以勝情勸事合

梁國治階平

大液晴泓蓬山秋。螢嘒蟬鳴堂。魚勝紅衣。
初。謝。霞。彩。晨。披。翠。幌。高。致。手。雨。路。華。曉。鏡。沙。繞。
檻。紛。碧。暈。而。俱。圓。石。磊。落。堆。盤。搏。清。光。而。不。定。
斯景物之最幽。芬芳之絕勝也。天子於是迴法
駕。出。通。英。庶。政。畢。萬。象。清。乘。秋。颺。之。澄。爽。喜。天
水之空明。過禁林之西苑。坐秘府之南榮。試采蓮
以。供。御。觀。闕。茗。而。怡。情。蒲。筵。風。微。竹。爐。火。燠。月
澗。方。融。春。濤。忽。奮。傾。從。石。鈿。都。疑。味。咽。三。危。點。

出。花。瓷。每。覺。香。過。九。醞。蓋。煎。以。涼。露。抵。金。莖。初
浥。之。華。而。掬。自。新。荷。實。玉。川。未。語。之。韻。爾。其。斜
灑。辭。波。輕。雲。飲。羽。翠。雨。麻。自。濡。霏。更。積。難。尋
圓。折。之。源。多。勝。方。諸。之。淡。抱。月。影。以。長。明。蹴。輕。颺
而。欲。墜。瑩。煙。曩。人。常。馥。郁。以。連。枝。出。水。亭。知
晶。瑩。而。滿。罌。盃。而。不。薦。誰。知。飲。彼。天。漿。受。之。以
離。正。足。助。夫。幽。事。乃。燕。都。梁。然。艾。他。火。候。均。湯。眼
匝。饒。金。碾。以。雪。飛。注。鈿。餅。而。凡。脰。廉。襜。入。手。看。碧
乳。之。流。匙。紗。帽。籠。頭。聽。松。聲。之。饒。榻。固。應。名。甘。侯
於。建。陽。微。葉。嘉。於。鉅。合。則。有。鶴。山。領。新。業。就。波。別
陽。紫。筍。驚。雷。綠。花。鮮。雨。巖。道。之。中。頂。白。甌。宜。封。

君。漢。之。小。團。朱。臣。可。剖。當。一。旗。之。旨。展。入。雪。液。以。
交。融。飲。三。沸。之。適。均。沃。雲。腴。而。欲。舞。色。侔。荷。蕊。
本。非。又。新。之。傳。氣。襲。蓮。香。更。壓。伯。翁。之。譜。若。高。
挹。文。山。澗。下。取。乎。井。華。揚。子。江。中。頗。聞。漱。玉。唐。王。
谷。裏。更。化。浮。槎。迤。驛。銀。罍。苦。調。符。之。甚。遠。通。厨。
竹。筴。笑。機。汲。之。徒。奢。縱。廣。討。泉。源。不。過。珠。珠。泉。谷。
即。旁。加。酌。劑。祇。知。橄。欖。胡。麻。安。得。碧。甯。清。潤。翠。
頰。流。葩。取。沆。瀣。之。真。味。淪。涵。淡。之。名。茶。故。飲。之。則。
不。滯。胸。之。則。常。惺。而。路。必。承。荷。斯。合。德。於。君。子。亭。
先。滌。器。更。通。妙。手。仙。靈。苦。口。回。甘。時。幸。獲。親。帝。
座。洗。心。著。潔。何。妨。徧。飲。彤。廷。惟。儻。然。其。不。滓。乃。

有取乎獨醒、豈徒逸客清談、託嗜於王濛之癖、
問園別趣、罕奇於陸羽之徑也哉、

昔人論茶以色香味勝、讀此賦尤覺神韻過之、

標注 題本 御製詩題

堂、化書、辛氏之魚、可名堂、

魚騰、楚詞、魚騰、今騰予、

通英、種詩、吾君方急賢、日夜坐通英、注、述英、閣名、

宋仁宗置、

門茗、系君漢、茶錄、建安門茶、謂之茶戰、

三危、呂氏春秋、水之美者、三危之兩路、

九醞、西京記、漢制八月飲酎、用九醞、

玉川、盧仝自号玉川子。

方諸、淮南子方諸見月則津而為水。

金碾、歐陽修詩黃金碾畔綠塵飛。

碧乳、茶譜、婺州拳岩茶煎之如碧玉之乳。

松聲、茶院、急煮候有松聲。

日侯、孫樵与焦刑部書、晚日侯十五人、盖建陽名品也。

霍山、龍波、鶴山、領在洪州、龍波、顧渚別境也。

中頂、茶譜、蜀雅州岷嶺道縣、蒙山中頂產茶。

小團、~~建~~田錄、茶君、復造龍鳳小團以進。

又新、張又新、有蒸茶水記。

伯旬、茶品、劉伯旬品泉、以楊子江中冷水為第一。

井華、杜詩、呼童汲井華。

康王谷、廬山記、康王谷水、陸羽以為第一。

篔簹、篔簹音筒、以竹通水也。

苦口、清室錄、皮光業、耽茗、呼茶為苦口師。

王儼、世說、王儼嗜茶、人至、輒命飲之、士大夫每往候、必云。

今日難免水厄。

陸羽、陸羽字鴻洲、性嗜茶、著茶經三卷。

為政二印年 神農本草經

也 是 名

者 齊 是

